エッセイ　上達のヒケツ！

読んで書く、しかないのでは？

いとう みく

いきなり企画を批判するようなことを言って申し訳ないのですが、「上達のヒケツ」などというものがあったら苦労しないと思うのです。

いい作品を書きたい。これだ！　と自分が思えるような物語を書いてみたい。次作こそはと思いながらも、手が届かない。書きながら今度はだんだん、これおもしろいんだろうか？　わたしが書きたいことはこれだったっけ？　あれ、ヘタになってない？　と不安になってくる。

それでもまた書く。

わたしの場合はそんな感じで、自分で上達したと思ったことは一度もありません。ですので、創作に関して「上達のヒケツ」というものはわたしにはわかりません。

ただ、文章という点にしぼって言えば、上達するヒケツはいくつかあると思います。

わたしがおすすめしたいのは、自分の好きな作家の本を書き写したり、繰り返し繰り返し読むという方法です。

文章を書き写すことで、句読点の打ち方や会話のテンポ、文章運びなどを、頭ではなくリズムとしてからだにしみこませることができるような気がします。

わたしもいくつか短編や絵本を書き写したことがあります。思い返してみると、子どもの頃、わたしは好きなテレビドラマやアニメを録音して、それをノートに書き写す（いわゆるテープ起こしです）というあそびをよくしていました。その時は単に面白がってやっていただけなのですが、そんな方法も無きにしも非ず、と思います。

ただこれは文章についての話で、創作はまた別です。

わたしは「季節風」という同人誌に入っていることもあり、仲間の生原稿を読ませていただく機会がちょこちょこあります。そうしたとき案外多いのが、文章はうまいけれど……という作品です。

文章自体は洗練されていて、躓くところもなく、さらっと読み通せるのだけれど、なにも残らない。手ごたえを感じない。引っかかるものや響くものがない。

えらそうなことを言いましたが、わたしも「季節風」に